

古代

第3章 古代国家の展開 1. 天平時代 (1) 遣唐使

唐に渡った陰陽師 — 春苑玉成 —

『続日本後紀』承和三年(八三六)年四月一日条
 伯耆国の人で陰陽師の穴人首玉成が春苑宿祢の姓を賜る。孝元天皇第一皇子、大彦命の子孫である。

『続日本後紀』承和六年八月二十五日条
 (大宰府の) 今月十九日の奏状によると、遣唐大使の藤原常嗣が七隻を率いて、肥前国松浦郡の生属嶋に到着した。先に到着した録事の大神宗雄の船と合わせて八隻である(中略) 陰陽師の春苑玉成ら十人は、乗船の完成を待ち、順次帰京することを命じた(後略)。

『続日本後紀』承和八年二月二十三日条
 遣唐陰陽師兼陰陽請益で正八位上の春苑宿祢玉成は、唐滞在中に『難義』一卷を得た。陰陽寮に諸生へ学習させることを命じた。

『続日本後紀』承和八年閏九月二十八日条
 伯耆国八橋郡の人で陰陽博士正六位下の春苑宿祢玉成の母である曾祢連家主女と、姉妹男女ら一族は、本籍地を右京三条一坊に移した。

『入唐求法巡礼行記』開成三(日本では承和五)、八三八)年八月四日条
 大使から「揚州の開元寺に納める仏の」画像の作成は、卜筮で不吉と出たので取りやめた。来年、帰国時に奉納するつもりである」と連絡を受けた。

『権記』(藤原行成の日記) 長保三(一〇〇六)年二月十九日条
 (前略) 光宗(陰陽師、賀茂光宗)が(仁王会の開催日として)勘申した二月二十八日庚午は、婆羅門僧正(奈良の大仏の開眼供養を行った僧・菩提僊那)が「子孫が死ぬ」と、春苑玉成が「大凶の事」と云った日です。来月十日壬午に仁王会を行うべきです(後略)

〈余談〉

平安時代末、安倍晴明の子孫の土御門家が編纂した『陰陽略書』から、玉成が唐の学者に質問した内容の1つがわかる。同書「三宝吉日(万事に吉であるとする日)の項には「吉備大臣(吉備真備)・婆羅門僧正(菩提僊那)・春苑玉成等の説がある」とあることから、陰陽寮では「三宝吉日」の判定は、吉備真備説と波羅門僧正説のどちらに従えばよいのか」が問題となっていたが、玉成はそれらとは異なる第三の説を持ち帰ってしまったと考えられる。陰陽師たちは一層困惑したものと思われる。

解説

『続日本後紀』は、伯耆国八橋郡(今の東伯郡の一部)出身の陰陽師春苑玉成の事績として以下を伝えている。

- ①もとは穴人玉成と称していたが、遣唐使として唐へ出発する直前に春苑姓を与えられたこと。
- ② 838(承和5)年の遣唐使に、「遣唐陰陽師」兼「陰陽請益」として加わったこと。
- ③唐にいる時に『難義』一卷を入手したこと。
- ④帰国後、陰陽博士に昇進し、母親たちを都に呼び寄せたこと。

遣唐使の一員としての玉成の任務は、出発から帰国するまでの日々の吉凶を占うことであった。この時、一緒に入遣した天台宗の僧侶、円仁の日記『入唐求法巡礼行記』には、大使の藤原常嗣が占いにより仏画を作成する日を変更したことが記されているが、玉成が関与したものと考えられる。兼務の「陰陽請益」とは、陰陽道に関わる疑問や問題点を唐の学者に質問することを任務とするもので(「請益」とは「不明の事柄について、教えを請うこと」)、彼の持ち帰った『難義』は、その解答をまとめたものと考えられる。

また、三蹟の1人として知られる藤原行成の日記『権記』1006(長保3)年2月19日条には、婆羅門僧正と春苑玉成がいずれも不吉とする日であるため、宮中行事の日程を変更したことが記されている。これより『難義』の内容は「春苑玉成説」として継承され、玉成は11世紀には上級貴族にも知られた存在であったことがわかる。

平安時代初期、陰陽道や仏教の思想・教義についての日本での理解は十分なものではなかった。疑問を解決できないことも多く、留学生や請益による新知識の輸入が図られた。春苑玉成は、日本の陰陽道を確立する基礎をつくった人物といえる。

(担当：石田敏紀)

参考資料

- ・石田敏紀「遣唐陰陽師 春苑玉成」(『郷土と博物館』48 鳥取県立博物館 2003年)
- ・佐伯有清『最後の遣唐使』(講談社現代新書 1978年)
 * 2007年に講談社学術文庫で再版